

サ  
バ  
イ  
バ  
ル  
・  
ウ  
エ  
デ  
イ  
ン  
グ  
2

*Survival Wedding 2*

OHASHI  
KOSUKE

大  
橋  
弘  
祐

「航平ー、マイちゃんが帰ってきましたよお」

広瀬麻衣子は酔うとつい甘えたくなる。今日も仕事の打ち上げで飲みすぎた。どうやってマンションに帰ってきたかは覚えていない。玄関のドアを開けたのと同時に、同棲している航平へ倒れるように抱きついた。

「飲みすぎだよ、麻衣子。飲んで帰ってくるときは連絡しろって言っただろ……」

「ねえ、航平はマイちゃんのこと好き？」麻衣子はあきれられる航平の両腕を掴み、体を揺らした。

「ああ、好きだよ」航平はしゃがみながら言っつて、ブーツのジッパーを下げてくれた。最近買ったジミーチュウの新作だ。

「どのくらい好き？」

「地球よりも宇宙よりも好きだよ。……そんなこと言っつてないで、早く風呂入っつて寝ろよ。ほら、歩けるだろ」航平が腕をひく。

「だっこして」

「あのなあ……」

「マイちゃんは毎日遅くまで働いてがんばっつておるのだよ」

麻衣子は大手のネット企業に勤めていて、アパレルのショッピングサイトを担当している。昨日はSNSと連動させる新機能のリリースがあり、この三日間は寝ずに働いた。それに、航平とは同

棲生活が長いから、こうして酒の力でも使わないと甘えられない。

航平は何も言わずにため息をつき、麻衣子を膝の裏から抱えあげ、寝室に向かう。

「爪がささって痛いって」

いやがる航平にかまわず、麻衣子は首にしがみついた。

「今日、麻衣子のお母さんから電話がかかってきたぞ。うちの娘はちゃんとやっていますか。体は壊していないですかって心配してたぞ」

航平の言葉には聞こえないふりをした。母と話すと、いつも結婚の話になり喧嘩になるからだ。そのせいで最近では電話に出ないようになってしまった。

コートの上から航平の体温が伝わってくる。きっと今日のことは明日になったら覚えてないんだろうな。薄れていく意識の片隅で思う。

ダブルのベッドにおろされ、体がシーツに深く沈む。コートは着たままだし、メイクも落としてない。でも、もう無理だ。寝てしまおう。

「ここに水置いておくからな。ほら、コート脱いで」

サイドテーブルにペットボトルの水を置いた航平は、コートを脱がせようとする。目の前に航平の顔が来た。

「ん」麻衣子は唇を尖らせ、顔を振り、脚をばたつかせてキスをせがんだ。

「酒臭いよ。麻衣子……」

最後の力を振り絞って、あからさまにいやがる航平の顔を掴み、唇を押し当てた。充実感が満ちて、眠りに落ちていく。布団をかけてくれる航平の姿が臉に残った。

「あのさ、麻衣子……。仕事が大変なのもわかるけど、いつも俺が寝てから帰ってくるし、たまに話したと思ったらこれじゃ、なんのために一緒に住んでるかわからないだろ。どうせ今日のこと覚えてないと思うけど、もう少し俺のことも考えてくれよ」

暗闇の中で航平が何か言っている。でももう意識が消えようとしている。

「なあ麻衣子……。頼むよ。俺たちもう三十五なんだからさ……」

朝、目が覚めると同時に、膝に痛みが走った。きつと酔って転んだんだ。打ち上げのあと、同僚とタクシーに乗ったところまでしか記憶がない。

隣に航平の姿はなかった。コピー機のメーカーで働く航平は麻衣子より早く入社して早く帰ってくる。生活のリズムが違うので、お互いを起こさないように寝室を別にしていた。

麻衣子は布団の中をのぞく。

「やっちゃった……」

お気に入りのスカートがめくれ上がってしわだらけだし、ストッキングは引き裂かれたように伝線して、そこから青くなった痣が顔を出している。三十過ぎて傷の治りが悪くなった。二ヶ月前にできた反対の足の痣もまだ治っていない。

時計を見ると、起きる時間まで五分あった。二度寝したくなかったが、大切なことを思い出して、咄嗟に体を起こした。

今日は幹部が顔合わせをする会議がある。麻衣子のチームは設営の当番だった。

去年、麻衣子の勤める会社は海外の企業に買収された。「ヴォヤージュvoiyage」という世界的な雑誌を

手掛けている出版社で、本格的に日本に進出する足がかりにするのが狙いらしい。

人事の子に聞いた情報だと、社内のルールが大きく変わり、麻衣子のチームには女性誌の編集長が就くことになる。もともとvoiyageの編集者として下積みをした人で、ファッションにも経営にも強い人ということでその人が引き抜かれた。

麻衣子は新しい部長に期待していた。というのも、ニューヨークへの海外転勤を希望したが、管理職を三年経験するのが会社の規則だと断られたからだ。

「マネージャー」という肩書きが付き、管理職に昇進したのはつい最近だ。あと三年も待ったら三十八になる。想像すらしたくない。

だから、早く転勤させてもらえるよう、その部長に直訴しようと決めていた。十三年間もまじめに働いてきたのだ。それくらいのがまま聞いてくれたっていい。

もしかししたら転勤が決まるかもしれないと思うと、つい「ニューヨーク」と昔流行ったR&Bを口ずさんでしまう。

いやいや。歌っている場合じゃない。麻衣子は化粧を落としてないことを思い出し、あわてて洗面台に向かう。

よかったあ。鏡の前で麻衣子は口にした。ほうれい線は出てない。本気で胸を撫でおろした。もう化粧を落とさないうで寝るのはやめよう。

でも、クレンジングでメイクを落とすと肌がパリパリだった。韓国旅行で安く買ってきた美容液を大量投入し、特に目のまわりとほっぺの線には念入りに塗った。日焼け止めが入ったBBクリームはSPF40。世の中で一番恐ろしいのは紫外線だ。時間がなくなってきたのでリキッドのファンデーションとチークをあわてて重ねた。

キッチンでバナナとセロリとモロヘイヤと黒酢をミキサーにかけ、恐ろしいほどまずい茶色い液体を飲み、美容とダイエツトのためにやっている毎日の修行をこなしたあと、麻衣子はジャケツトに付いたタグを切るため、航平の寝室からはさみを借りようとした。

航平はスターウォーズやアメモミが好きで、寝室にはそのおもちゃが増えてきた。麻衣子にとってはガラクダでしかないが、この前、その下に隠れていた指輪のケースを見つけた。

もう同棲をはじめて四年目だ。きっと結婚を考えているのだろう。でも、それを見つけたとき麻衣子は複雑な気持ちになった。もちろん結婚はしたいけど、もし転勤が決まったらどうするんだ。今の同棲生活と何か変わるのか。そう考えだすと思考が止まってしまった。

そのときケータイが震えた。会社からのメールで現実に戻る。

靴がぎゅっしり詰まった下駄箱から、買ったばかりの十二センチのハイヒールを取り出した。元敏腕編集長の新しい部長はセンスを認めてくれるだろうか。そんなことを考えながら、部屋を出た。

エレベーターを降りながら、スマホで昨日リリースした新機能のユーザー評価を見た。ポジテイ

ブなコメントが多い。サイトの訪問者数も購入率も悪くなく、いまのところ返品も少ない。

画面をスケジュールに切り替えた。取締役の会議のあと、同期とビストロへランチに行って、午後はクライアントと大切な商談に行く。明日は埼玉の倉庫へ行って配送フロアの打ち合わせだ。週末は美容院とネイルサロンと脱毛にいかなければいけない。

ヘッドホンから英会話の教材を流し、駅に向かう。階段を上っていると発車のベルが鳴った。一件反射でつい駆け上がってしまう。



「あんた、昨日はちゃんと帰れたの？」

会社に着くと、隣の席の加奈が話しかけてきた。五年も一緒に働く同い年の腐れ縁だ。ただ、加奈はハワイで式を挙げたばかりで、もうすぐ披露宴を控えた既婚者だ。

「当たり前じゃない。ちゃんと帰って寝ました」

「あのねえ、あんた昨日いくつグラス割ったか覚えてんの？」

麻衣子は苦笑いして首を傾げた。

「四つよ。四つ。それで散々飲み食いしたあと、いつ転勤できるんだって占い師に絡んだんだから

ね。それでしかたなく涼君が化粧ほろほろで髪を振り乱した、お化けみたいなあんたをタクシーで送ってたんだよ。いまごろあんた、タクシートの運転手さんにお化け乗せたって、怪談されてるよ」「お化けって……失礼な」と言い返したが、記憶がないので声小さくなった。おそらく加奈の言ってることは本当で、みなに迷惑をかけたのだろう。

「とにかくお礼言いな。涼君に」

うしろの席に座る涼を加奈があごでさした。最近、派遣社員として入社したいまどきの男の子だ。バスケのクラブチームに所属していて、働きながらプロを目指しているらしい。ちなみに歳は十も離れている。

「涼君、昨日はごめんね。ご迷惑をおかけしました」

麻衣子が頭を下げると、「この人に変なことされなかった。酔うと人格変わるからね」と加奈が茶々をいれる。

「ぜんぜん平気ですよ。麻衣子さん、ずっと運転手さんとナツメロを歌ってましたから。なんでしたっけあの曲。小学生のときよく流れてた、あれ」

「グローブでしょ。麻衣子は酔うと小室哲也の曲ばかり歌うのよ」と加奈。

「そう、それ。ラップを歌えっつこかつたんですよ……」

うっ、そんなことまでしてたのか。顔が熱くなる。それにしてもグローブを小学生のとき聞いた

のか。時間の流れが速すぎる。とにかく今日から禁酒しよう。三か月前も同じような失敗をして、そう決めてこれだけ。

涼が席を立ったところで、加奈が顔を寄せる。

「あんなに酔って帰ったら航平も心配するでしょう。だいたいあんたたち最近どうなの？」

航平は加奈の旦那が紹介してくれたのが出会いだっただけ。

「別に普通だけ」

「ふーん、ならいいけど」加奈が意味深な言い方をする。

「なによ」

「最近、航平が早く結婚して落ち着きたいってよくこぼすんだって。うちの旦那が言ってた。なんか同僚もみんな結婚したし、親を喜ばせたいんだって」

「そのことなんだけど、実はさ……」

麻衣子は航平の部屋で指輪を見たことを話した。

「えーっ」加奈が大声を出したので「しーっ」と言って止めた。

「それ、絶対プロポーズじゃん。で、どうすんの麻衣子」

やっぱり航平は、プロポーズするつもりなんだ。指輪を見たし、この前は保険がどうなってるかと聞かれた。

本当にプロポーズされたら、わたしはいつたいていどうするのだろう。やっぱり歳のことを考えて結婚するのだろうか。

「うーん」

麻衣子が首を捻ると加奈が目を見開く。

「あんた、まさか断るの」

「そういうわけじゃないんだけど、今すぐどうしても結婚したいわけじゃないとか……」

加奈がどうしていいかわからないという顔をしている。

「そんなことよりさ、加奈。新しい部長どんな人なんだろう？」

なんとなくこれ以上は触れてほしくなくて、麻衣子は話題を変えた。

「voyageで下積みして、rizの編集長になった人でしょう。やっぱり相当キレる人なんじゃない」

rizというのはその部長が編集長を務めていたファッション誌だ。斬新な企画を当て続け、出版不況のご時世に発行部数を伸ばし続けている。

「でも、雑誌の人がうちみたいな会社来てうまくいくのかな」

「使えない上司じゃなければいいね」

話を合わせたが、実際、内心は期待していた。マンネリ気味だった仕事が変わるかもしれないし、海外勤務まで決まるかもしれないと思うと胸がそわそわする。いつものルーティンワークが今日は楽しく感じられて、あつという間に時間が過ぎた。

新しい幹部同士が顔合わせをする取締役会の時間が迫り、麻衣子のチームはその準備に追われた。廊下で知らない顔を何人か見た。新しい部長かもしれないと思うと、つい必要以上の笑顔で会釈をしてしまう。

同期とランチに行く時間になった。会議の準備は算段がついたので、あとをメンバーに任せ、麻衣子はデスクに戻った。

そのとき、後輩の智美から電話がかかってきた。

「ああ、麻衣子さん。大変です。わたしはいつたいていどうしたらいいのでしょうか」あわてた声だった。元プログラマーの智美は少し変わった子で、漫画とアイドルに詳しく、サイトのシステムを担当している。

「どうしたの、智美、落ち着いて」

「あの、なんていうか、資料が足りなくなっただけで、あと……プロジェクターが突然機嫌を損ねてしまって……、うんとすんとも言わないんです。自分なりに善戦はしてみたのですが、機械にはそれが伝わらなくて。あー、どうしましょう、麻衣子さん」

「え、プロジェクター映らないって、もうあと十分しかないじゃない」

まずい。会議が遅れたら、幹部に格好がつかない。新しい部長の面子を潰すことになる。でも今日は同期とランチだ。人気のビストロがやっと予約できたのだ。プロジェクターの設定ぐらい、その場にいる人がきつとなんとかしてくれるはず。

いや、だめだ。智美に恥をかかせられない。

プロジェクターが映らなかつたときのために、麻衣子はあわてて資料をプリントアウトした。同期に《ごめん、今日のランチ行けなくなつた！》とメッセージを送り、書類の束を抱えて会議室に向かつた。でも、新しいハイヒールだからうまく走れない。でも、そんなことはかまつてられない。麻衣子は内股走りで急いだ。

節電という名の経費削減で冷房も効いてないから、汗が滲み、化粧が崩れてきた。毛穴が開き、前髪が額に貼りつく。

「あっ」

廊下を曲がつたところで顔に鈍痛が走り、持っていた書類が宙を舞つた。

誰かにぶつかつたようだ。

「すみません」

あわてて、落ちた書類を拾つた。

しゃがむとき、ちらつと相手の顔が見えた。彫の深いワイルド系の顔だつた。ヒールを履いて胸にぶつかるくらいだから、相当背丈がある男だ。ぶつかつたとき、胸板が厚いのも伝わつてきた。

なに、この昼ドラみたいなのシチュエーション——。

書類を拾つてるうちに、手が触れ、あ、すいません、つて感じで、お詫びにお食事でもつてなるかもしれない。憧れの仕事と一緒に、新しい恋もついてくるのか？

きやー、何考えてるのわたし。航平っていう彼氏がいるじゃない。

「おい、そのあほ毛」

男の声が聞こえた。自分に向けた言葉だとは思わなかつた。

「お前だよ。あほ毛女」

え、わたしのこと——。

顔をあげると、顔が濃く、ぎろつとした二重瞼の男に見下ろされていた。いかにも上質そうなスーツを着ている。

「お前だけだけファンデーションとチークとマスカラ塗つてんだ。俺のシャツに化粧がついて、お前の顔のプリントシャツみたいになつただろ」

男の真っ白なシャツに目を向けると、おでこのベージュと頬のピンクとまつ毛の黒い線がきれいについていた。



「え、あっ、すみません……」

麻衣子が頭を下げると、男は黙ったままこっちをにらみつけている。

「あのう、クリーニング代出しますんで……」

「あほか！ このシャツはマルジェラの新作だぞ。クリーニングなんかに出せるか。あほ毛ほ、うほのお前が着ているH&Mのシャツとは違うんだ」

たしかに今日はH&Mの白シャツを着ている。でも、これはリーズナブルなアイテムをこなれた感じに着こなす、あえてのH&Mだ。というか、なんでわかったんだ。

いや、そんなことはどうでもいい。あほ毛あほ毛ってなんなんだ。女性に失礼だろ。

男は舌打ち交じりに「これだから、ネットの人間は」とジャケットの襟をただし、その場を立ち去る。

咄嗟のことで頭がうまく回らなかったが、冷静になるとものすごく腹が立ってきた。言い返せばよかった。廊下の消火器を蹴り飛ばしたくなった。



会議の設営に時間をとられたせいで、結局ビストロどころか何も食べられなかった。

「涼君、そろそろ行こうか」

気合いを入れるためにレッドブルとエスプレッソを同時に飲み、涼と山蓉さんよう商事という大手のアプリルメーカーに向かった。

その会社はブライダル事業に乗り出すらしく、ウエディングドレスや小物を、麻衣子の会社が運営するサイトで取り扱わせてもらうという案件だった。

ウエディングドレスは一生に一度の買い物だ。他の商品と違い、生地サンプルを送ったり、返品が多かったりするので、業務フローが煩雑になる。ただ、単価が高く、式場や婚活サービスなどブライダル関連の広告を入れやすい。成功すればビジネスとしては魅力的だった。

案の定、プレゼンの十五分前に、取締役の内田からメッセージがきた。

《俺がつくったコネクションだ。気合い入れてとってこいよ》

麻衣子としても契約したかった。山蓉商事は歴史のある日本のメーカーだけあって、素材も縫製もいい。山蓉商事と契約できれば、いずれはドレス以外の服も取り扱えるかもしれない。そうすれば平均単価と販売数もあがって、送料をサービスできる。不景気であつても女の子にはオシャレを我慢してほしい。

ただ、山蓉商事は何度も接待を要求したり、短い納期で無理を言う下請け泣かせのクライアントで有名だった。

会議室に入るといきなり甲高い声が聞こえてきた。

「ああ、麻衣子。今日は素敵なジャケットじゃない」

競合のIT企業で営業をしている千春だ。芸能人がブログをやっていることで知名度とユーザーを一気に獲得した新興の企業だ。社長と社風がチャラチャラしているのが気に入らない。

千春の会社はすでに山蓉商事とウエブまわりで年間契約していて、今回の案件も自分のところで巻きとろうとしていた。

千春とはこういったコンペで何度も顔を合わせていて、加奈がセッティングした飲み会で、何度か話したこともある。今日は短めのスカートで、髪を巻いていて、童顔に見えるメイクで、決して同じ三十五歳には見えない。それどころか周囲にお色気を撒き散らしている。

麻衣子はふと足元を見て、しまったと思った。千春は同じブランドのハイヒールを履いている。しかも千春のは今年の春夏だ。わたしのはセールで買った去年の秋冬。半年古い。

千春もそれに気づいたのか勝ち誇った顔をする。

「千春こそ、今日も髪形かわいいじゃない。同い年には見えないわ」

麻衣子は負けてられないと思っただけ返した。千春はひきつった笑みを浮かべる。

「麻衣子もそのネックレス似合ってる。自分で買ったんでしょ」

「そうよ。三十五歳になった記念に買ったの」

この件は、毎回恒例で、お互い半分は冗談で半分は本気で言っている。

「今日はかわいい子連れてるじゃない」

千春が涼を見て、男みたいなセリフを言った。

「君、このお姉さんには気をつけなよ。中目黒の居酒屋で隣の席の男と喧嘩になって出禁になった女だからね」

やめる。昔の話を吹きこむな。涼が苦笑いをしている。

そこに先方の重役が入ってきた。「専務ー」ハートマークが付きそうな声で、内股走りですり寄り寄っていく。赤いソールが大理石の床にぶつかりかつかつと音を立てた。

あの手のタイプはうまく立ち回って、楽に仕事するタイプだ。実際、前回のコンペは千春の会社が接待攻勢に出て持っていかれた。

この前、千春が若い男と歩いているのを見たことがある。しかも、二回とも別の男だった。今日は女子アナ風の上品なスタイルだが、そのときは西海岸風のカジュアルだった。千春は仕事とプライベートでキャラもファッションも使い分けている世渡り上手だ。

でも、千春がいてくれて安心して自分がある。この歳になると、結婚をしないで仕事をしているというだけで戦友のような気がしてくる。それに千春はオシヤレだし、見た目も若いから自分もがんばらなきゃって気持ちも湧いてくる。張り合いが出るのだ。

「なんだね、このインタラクティブコレクションっていいのは」

プレゼンが終わると、反対側に座る男の列からとがった声で質問が飛んできた。山蓉商事の専務だった。

「年末に取り扱いブランドをお呼びしてファッションショーをおこなうんですが、それを動画で配信して、ランウェイを歩くモデルが着る服を、会場でもネットの向こうでもすぐ購入できるようにします」

「このトークライブってのは、いるの？」

麻衣子たちが企画するショーは、働く女性をターゲットにしているので、ただモデルを歩かせるのではなく、独身をつらぬく女優や国際結婚をしたアーティストなどのトークライブを入れていた。「ひと口に結婚といっても、式や旅行だけで満足できる時代は、終わろうとしているんです。生き方という答えのない問題にどう向き合うか、女性はみな真剣なんです。それに、今までと違うものを目指したほうがメディアもとりあげてくれます。御社のドレスを注目してもらうためにもちょうどいいかと思います」

「じゃあさ、そのショーはどうやって知ってもらうの？」専務が椅子に仰け反り、頭のうしろで手を組む。

「サイトの会員、百万人に発行しているメールマガジンやSNSで告知します」

「メルマガね……。そんなもんで知ってもらえるのかね。俺なんて開いたことないよ」

「クーポンなどの特典を付けますので、五パーセントくらいのレスポンスは見こめます。ですから、五万人くらいにはリーチができます」

説明したのに言葉が返ってこない。沈黙が流れる。

きつと、うちをコンペから落ととして、千春の会社と契約する気だ。麻衣子は言い返しながら思った。千春の会社は接待がすごいのだ。

「システム構築にコストかけすぎなんじゃないの」今度は別の男性が声をあげた。「在庫情報をリアルタイムで反映させるだけでこんなにかかるかね……」

「たしかに。このプランだと費用対効果が悪いかも」今度は競合の千春まで質問をぶつけてきた。

おいおい。それはルール違反だろう。やっぱりわたしは千春が嫌いだ。

「いえ、短期的には効果が出ないかもしれませんが、三年で回収できます」麻衣子は言い返した。すかさず千春は口を開く。

「でも別で保守費がかかるんでしょう」

「保守費ほどのシステムにしてもかかるでしょう」

「でも、これはオーバースペースじゃない？」

「セキリティを担保するにはこれくらいは必要になります」  
いつの間にか、千春と言い合いになっている。わかっているけど、口が止まらない。

「それに多少は価格を下げることも可能です」

「どれくらい？　うちの予算感だと、あと二割はひいてもらわないと承認おりないな」先方の男性社員が口を開く。

「すぐには回答できませんが、おそらくそれくらいであれば可能だと思います」

「これ以上値引きして大丈夫なんですか」涼が隣でささやいた。

「大丈夫よ」

「麻衣子さん。意地張らなくなつて」

涼の言うとおりだった。これは意地だった。

ただ、この業界は一度システムを導入してしまえば、他社に乗り換えるのが難しいのだ。保守や運用で値引き分を回収できる。だから最初は赤字覚悟で仕事を受ける。

しかも、今回契約がとれず、この会社のドレスを取り扱えなかつたらショーが地味になる。

だが、男たちは「営業部がそれで納得するんですか」「この前も経費使いすぎだつて財務にさされたらどう」「このご時世、社員を残業させるわけにもいかないからな」そんな言葉を飛び交わしている。

あー、もう。これだから日本企業は。そんなんだから、日本企業はグーグルとアマゾンに負けるんだ。

これはユーザーのため、会社のため、ニューヨークのためだ。アドレナリンが噴出する。

麻衣子はジャケットの袖をまくり、立ち上がった。

「とにかく、うちと契約してくれたら、問題ありませんから」

クライアントの男子社員が目を丸くしている。「なんだ、あの女は」そう顔に書いてあった。

あー、なにやってんだ。わたしは……。

帰りに涼とカフェに入り、麻衣子はテーブルに突っ伏して息を漏らした。

いつもこうだ。ぐだぐだ話しているのを見ると、つい自分でやると言ってしまう。あんなこと言わなければよかったってあとで後悔する。

ジャケットを勢いよくまくり上げたせい、肘のステッチがほつれていた。もう一つため息をつく。

「どうしたんですか、麻衣子さん」涼がジュースのストローをくわえながら聞いた。

「ほら、さっき、みんなの前で偉そうなこと言っちゃったじゃない。なんであんなこと言っちゃったんだろうって、思い出したら落ちこんできてさ……」

「でも、かつこよかったですよ」

「かつこよかった……?」

「はい。俺バスケやってるじゃないですか、麻衣子さん見てたら高校時代のキャプテンを思い出しました。どんなピンチでも必ずスリーポイントを連発して逆転してくれるんですよ」

エース広瀬麻衣子……。そんな言葉が頭に浮かぶ。できることなら、選手じゃなくて、ベンチで応援している、かわいらしいマネージャーになりたいかった。

つい、またため息をついてしまう。それを聞いた涼が顔を覗きこむ。

「麻衣子さんだったらできますよ」

「え?」

「いままで無理だと思うことでも、なんだかんだやってきたじゃないんですか? だったら、きっとできますよ。あとはいつもどおり一生懸命やるだけ」

「まあ、そうだけ……」

若いくせに妙に達観したこと言うぞ。この子は何を考えているか読めないところがある。

「それにしてもこのアボカドサンドうまいっすね」とサンドイッチを口に運ぶ。

涼は顔が小さいのに目が大きい。女の子のような顔をしている。でも、バスケをしているからか、背が高く、体がスリムなのに筋肉質だ。店員や客も涼をチラチラ見ている。最近の男の子はこうい

うふうに進化したのか。

そして何よりもうらやましいのは、その肌だ。

角質がきめ細かくて、すべすべなのが見てるだけでわかる。どんな高級なファンデーションを塗っても、若い素肌には絶対勝てない。きっと美容外科で注射何本打っても、その肌には戻れないんだろう。時間の流れは酷だ。

「どうかしました?」と涼がこっちを向く。

気づいたら、涼の肌に見とれていた。

「ううん。なんでもない」

麻衣子はあわてて首を振り、コーヒーカーップを口に運んだ。

「涼君はさ、休みの日は何してんの?」

「週末ですか。午前中は練習で、午後はバイトですよ」

「えっ、週末もバイトやってんの?」

「はい。トレーニングを兼ねて引越しのバイトやってるんです」

そうか。東京で一人暮らしをするならそれなりにお金がかかる。若者が置かれている苦境はよくニュースで見かける。ちゃんとご飯は食べているのだろうか。家賃は払えているのか。そんなことが気になってくる

「食べな」麻衣子はサンドイッチの半分を涼の皿に移してやった。

「え、いいんすか」と言いながら、あつという間に平らげると、麻衣子の心配をよそに「これ、また食べに来ていいですか」と水を持ってきた女の店員にと話しかけている。

涼は軽い。こういう要領のよさそうなタイプは、すぐ女を好きにさせて浮気をしそうだ。

そんなことを考えたが、涼にとつて三十五の女なんて、きつと女じゃないだろう。生きている世界が違うのだ。これからいろんな人と出会い、いろんな経験をして、笑ったり泣いたりしながら成長していくのだろう。

「でも、バイトとか言いながら、本当は女の子とデートしてるんじゃないの」

麻衣子が軽口を叩くと、涼は「そんなことないっすよ。でも麻衣子さんだったらデートしてもいいかな」と言っつて、大きい目でこつちをじつと見つめる。ドキっとしてしまう。

こつちの反応を試しているような顔だった。すぐに、からかわれることに気づいて、「何言ってるんよ」と肩を殴った。

「いっつてー。麻衣子さん力強いっすね」

「あんたが変なこと言うからよ」

お茶が終わったあと、涼を会社に戻して、自分は百貨店に寄った。裾上げしたパンツを引き取るためだ。仕事のついでに用をすませると、時間を得した気持ちになる。

デパートから最近できた地下街を歩いて駅に向かった。

英会話教室の前にあるパンフレットを見て、そろそろ英語の勉強を本格的に始めないといけないことを思い出した。転職が決まれば、TOEICの試験だってある。もし山蓉商事との契約が決まったら勉強する時間を作れるのか。一日三十時間くらいあればできたのに。そんな勝手なことを思う。

次に目に入ったのは旅行代理店の前にあったポスターだった。

「今年こそ温泉婚」というコピーに向かって、「なんでも婚をつければいいってものじゃないだろう」と口の中で言っつてみる。

その先の液晶ビジョンには結婚情報誌のCMが流れていた。サプライズで彼氏から指輪を渡されプロポーズされる演出だ。

結婚こそが女の幸せという、一方的な圧力をやめてほしい。

三十になる前は結婚に焦ったこともあった。でも今は自分の生活に満足している。だから無理に結婚しようとは思わない。結婚したいと思ったときに結婚する。それが一番だ。

「あそこで腰に手をあててウコン飲んでるのが広瀬さんです」

会社に戻って一息つくくと、智美の声がした。

会議室から「呼んで来い」と男の声が聞こえる。

どうやら、宇佐美という新しい部長が一人一人面談をしているらしい。それにしても、ウコンを飲んでる女って、他に言い方があるだろう。

「新しい部長って、どんな人だった？」加奈に声をかけた。

「あ……、うん。まあ、面白い人だったよ」

「やっぱり、キレものだった？」

「まあ、キレものって言えばキレものなのかな……」

なぜか加奈の歯切れが悪かった。

訝りながらドアをノックし「失礼します」と部屋に入ると「あ」と声を上げてしまった。脚を組んでソファーに仰け反っていたのは、今朝、廊下でぶつかった男だった。

「座れ」

麻衣子は小さく頭をさげ、向かいに座った。改めて見るとやっぱり顔が濃い。身に付けているものは全てブランドものだとわかった。ただ、シャツにはファンデーションがついてない。よく見ると今朝見たものとは別のシャツを着ている。胸のあたりにフリルがついていた。

「今朝はすみませんでした」かたちだけ謝った。

「いや、いい。お前のおかげで運命の一着に出会えた。知り合いのショップに行ったらいいのが見つかったんだ」

宇佐美はわざわざ立ち上がり、ジャケットを脱いでシャツをこちらに見せた。胸のフリルが揺れる。フラメンコのダンサーが着ているようなシャツだ。正直、何がいいのか全くわからない。少なくとも一緒に歩きたくはない。女性誌の編集長ってみんなこういうのか。理解に苦しむ。

職歴や業務内容を記入した書類を宇佐美は手にとった。

「広瀬麻衣子か……。だからH&Mを着てるんだな」

イニシャルのことを言っているのだろうか。どういう反応をしていいかわからず、麻衣子はハハと笑って流した。

「お前は海外勤務が希望か……」

書類には自分の今後のキャリアプランについて書いた資料を挟んでおいた。

「お前だけだよ、自分のキャリアプランをここまで細かく書いたのは。希望はニューヨークの本社か?」

「は？」

「どうして、ニューヨークがいい?」

「わたしが子供のころ、服を買いに行くのってすごく大変なことでした。一日がかりで渋谷や青山に行って電車賃もかかった。でもネットなら、どこに住んでも好きな服が買えて、オシャレになれる。v o y a g eの知名度を使えば、その利便性を世界中に広められると思うんです。なので、わたしがニューヨークの本社に転職したら、世界中、どこにいても服が買えるオンラインの事業を始めたんです」

長年思っていたことを志望理由として話すと、宇佐美が顔をあげた。

「向こうに住んだり、働いたりしたことはあるのか？」

「ないです……。ただ……」

やっぱりそれを聞かれるか——。正直に気持ちを伝えるしかないと思った。

「短期ですがホームステイしたことはあります。それにわたし……、本当は留学して向こうに就職したかったんです。でも、そのときは家庭の事情でしかたなくあきらめました。それをずっと後悔してるんです。だから、どうしてもニューヨークで働きたいんです」

麻衣子が熱をこめて話すと、宇佐美は「そうか……」とうなずき、もう一度ファイルに目を落としました。

「お前、今年で三十五か」

「ええ」

「結婚は？」

「してません。なので、時間は融通が利きます」

「今日は会社にどんなバッグできました？」

「え？ バッグですか……。パーキンですけど」

唐突な質問に少し戸惑った。雑誌の元編集長だから持っているバッグが気になるのだから。

「よし、いいだろう」宇佐美はファイルを閉じた。「お前の気持ちは十分伝わってきた。上に話をつけてやってもいい」

「本当ですか。ありがとうございます」

いやなやつだけど、仕事はしっかりやるタイプなのかもしれない。社員の資質を見極めて、最適な組織をつくる。普通の管理職は、そんなこと面倒だからやらない。でもこの人は違うんだ。

「ただし、一つだけ条件がある」

「なんですか、条件って」

宇佐美は急に身を乗り出し、不自然な二重瞼をつくった。

「半年以内に結婚しろ」

は？ 麻衣子は絶句した。

「いまな、先進国の出生率は軒並み低下していて、日本は一・四四パーセント。ドイツは一・五、



韓国は一・一七だ。だが、世界的に少子化が進行している一方で、フランスは大幅に出生率を改善した。お前はフランスがどうやって改善したかわかるか」

麻衣子が呆気にとられていると、宇佐美は続ける。

「フランスは結婚をあきらめたんだよ」

「どういう意味ですか？」

「子供を産んだときの保障制度を充実させて、シングルマザーでも子供を育てられるように社会制度を変えたんだ。実際、学校でも父親がいない子供があたり前になってる。でも、日本でそんな制度受け入れられるわけではない。だからお前が体当たりで婚活して、この日本でどうやって結婚と向き合えばいいかコンテンツにして、世界に発信しろ」

「あのう、おっしゃってる意味がよくわからないんですけど……」

宇佐美は舌打ちしたあと、吐きすてるように言った。

「そのまんまだよ。お前が体当たりで婚活して、それを記事にして話題とアクセスを集める。それで山蓉商事と契約してブライダル事業で実績を残せ。少し前に、雑誌で似たような企画をやったな、それが好評で本もベストセラーになったんだ。それを今度はウェブでやる。もちろん他の仕事と並行してやれ」

「どうやら、冗談で言ってるわけではなさそうだ。」

「どうしてわたしなんですか？」

「高いヒール、完璧な爪、隙のないコーディネート、お前は男が脅威を感じる条件を見事にそろえている。お前みたいな着飾った金のかかりそうな三十五の女が結婚できれば、見てるやつが勇気がわくだろう」

「は？ 何言ってるんだ、こいつ。」

麻衣子が声を出せないでいると、宇佐美が面倒くさそうに聞いた。

「お前、バーキンの名前の由来知ってるか？」

「知ってますけど……」

「じゃあ、言ってみろ」

「たしか、女優のジェーン・バーキンのために作ったんですよ」

「そうだ。偶然飛行機でジェーン・バーキンと隣り合わせたエルメスの社長が、籠かごのバッグに物を詰めこんでいる姿を見て、贈ったのがバーキンだ。それ以来、バーキンは働く女の象徴として定着した。で、そのジェーン・バーキンがどうなったか知ってるか」

「それは知りませんけど……」

「三回離婚してるバツ三の独身なんだよ。いいか、これからの時代、自分で働いてバーキン買うことより、男に数万円のリングを買わせることのほうが、はるかに難しくなんだ。だからお前がそれ

をやれば、情報に価値が出るだろ」

言ってることがめちゃくちゃだ。こんな人が新しい部長になるなんて到底信じられなかった。

宇佐美は立ち上がり、窓の外を見て言った。

「それにな、他のやつに聞いても、お前が適任だって言ってたぞ」

「えっ、そうなんですか……」

「ああ。あの人は絶対結婚できないって、みな口を揃えた」

あいつら——、加奈たちの顔が浮かぶ。

「言っとくけどな、お前はついてるんだ。俺はな、ずっと出版社で恋愛と結婚の特集をやってきた。すべて完売。つまり、世界で一番恋愛に詳しいのは俺だ。俺に言わせれば、半年で結婚なんて算数を解くようなもんだ」

「結婚がそんな簡単なわけじゃないですか」

「いや、簡単だ」

「どうしてそんなこと言えるんですか」

「俺はお前をハムからハイブランドに変えることができるからだ」

麻衣子は顔をしかめた。

「どういことですか……」

「お中元でもらうでつかいハムあるだろう。桐の箱に入った外側だけ高そうなやつ。お前はあれと一緒になんだよ」

「どうしてわたしがお中元のハムなんですか」つい声を荒げてしまう。

「外側は装飾してあって高級。でも、あんなでつかいハムもらっても食えないよな。よくて最初の一口食べて終わりだ。しかも、ああいうでかいハムをもらうと、もらったほうもお返ししなきゃいけないって気持ちになる。それと同じように、お前と付き合う男は、この女にはいろいろこだわりがあって、高級な店に連れてけとか、高いプレゼントしろとか、いろいろ要求してくるんじゃないかっていうプレッシャーを感じるんだよ」

宇佐美は袖をまくってから身振り手振りを交えて説明する。ダイヤに縁取られた腕時計が見えた。「だが、同じ高級品でも、ハイブランドの服やバッグは高くても売れるし、ハムと違って長く大切に使える。これだけ安くて品質のいい服が出回っているにもかかわらず、いまでも売上を伸ばしているんだ。だからお前みたいな金のかかりそうな女でも、ハイブランドの戦略やマーケティングを学べば売れるんだ」

宇佐美は決め顔をつくる。

「どうだ、やるか？」

「絶対やりません」

「どうして」

「そんなのやるわけないじゃないですか。なに言ってるか意味がわからないし、仕事で結婚するなんて、どう考えてもおかしいですよ」

「じゃあ、クビだ」

「は？ なに言ってるんですか……」

「お前をリストラするんだよ」

え。麻衣子は言葉に詰まった。

「今、この会社の負債は三百億だよ。毎月一・六億、ずっと赤字を垂れ流して放っておいたから、もうあとがないとこまできてんだ。収益が見こめないなら人を減らすしかないだろう。上からもそう言われてるんだ」

だからってどうしてわたしなの。辞めさせるなら他にもいるでしょう。

「リストラは金のかかる管理職から切っていくのがセオリーだ。いまだったら若くてイキのいいやつを雇える。辞めたくなかったら、俺の言ったとおりにやって、山蓉商事をクライアントにして実績を残すしかない」

入社して以来、この会社で心血を注いで働いてきた。実績も残してきた。まさか、自分が会社を辞めさせられるなんて思ってもみなかった。

航平の顔が浮かんだ。関係は冷めてきているけど、長く付き合えばそんなもんだ。これもタイミングかもしれない。

いやいや。だからって結婚なんて仕事ですることじゃない。そりゃあ結婚はしたいけど、無理にしたいわけじゃない。今の生活だって変えたくない。

「お前、結婚したくないのか」

「そりゃあ、したいですよ……」

「じゃあ、いつするんだ」

「結婚したいと思ったときです。だって、無理して結婚したって幸せになれるはずじゃないじゃないですか」

宇佐美は再びソファアに座ったあと、「お前が結婚できる確率を教えてください」と足を組んだ。

「お前が結婚できる確率は、一パーセントだ」

「どうして、そんなこと言うんですか！」思わず大きな声を出してしまう。

「三十五歳までに結婚をしていない女が結婚できる確率は約五人に一人！ 総務省統計局国勢調査を基に算出！ どうせ、相手に求めるのは、仕事に理解があつて、自分の好きになる人で、尊敬できる人とか言い出すんだろう。そんなやつと出会える確率は多めに見積もって、それぞれ五十パーセント。お前みたいに結婚に対する意識が低いやつはさらに可能性が下がる。だから一パーセント

だ」

宇佐美は早口でまくしたてる。

「つまりな、結婚をしたいと願ひ、結婚するために行動しないと、もう結婚ができない時代なんだ。そんな現実をどうクリアするか、それをお前が文章で示せ」

「でも、文章を書く仕事なんてしたことないですよ……」

「だったら絶対に経験しておいたほうがいい。トリー・バーチはな、ラルフローレンのコピーライターだったんだ。そのキャリアを経て、自分のブランドを立ち上げて成功したからな。文章で自分の思いを伝えるっていうのは仕事の基本だ」

「だからって、結婚したら海外転勤なんてできるわけではないじゃないですか」

「ふん」宇佐美が鼻で笑う。「お前よくそんな考えで、海外転勤を希望するな」

「は？」苛立って、また大きな声を出してしまった。

「結婚したら、女は海外に転勤できないなんて誰が決めた。欧米ではな、夫婦は対等なんだ。もし女の転勤が決まったら、二人で話し合っただろうか決める。当然、男が仕事辞めてついていく場合だってある。それがグローバルスタンダードだ。もう女が仕事か結婚かを選ぶ時代は終わったんだ。両方を手に入れる時代が来てるんだよ」

「ここは日本ですよ。そんなの通じるわけじゃないじゃないですか」

「そうだ。つまり日本の常識が古いということだ。だからこそ、結婚してニューヨークでもどこでも連れていって、新しい生き方を提示するんだ」

「無理ですよ。そもそも仕事で結婚するなんておかしいですよ。本当に結婚したいと思ったときに結婚します」

「お前、クリスチャン・ディオールみたいになるぞ」宇佐美が急に立ち上がり大きな声を出した。また胸のフリルが揺れる。「ディオールはな、田舎でグリーンピース育てて、それにはまってな、パリからデザイナーとして誘われたのに、グリーンピースが気がかりでそれを断って、スタートが遅れたんだ。いまの生活が悪くないからって、本来やるべきことを先延ばしにすると、本当に大切なものを失うぞ」

なんでディオールの話になるんだ。意味がわからない。

「来週、俺がニューヨークの出張から帰ってくるまでにやるか辞めるか決めておけ」

「わたしやりません。いまの生活に満足してるんです」

麻衣子は「失礼します」と冷たく言って席を立った。

「おい、待て」

うしろから声をかけられた。

「なんですか」

麻衣子は振り返ってぞんざいに言った。宇佐美はさつき脱いだジャケットを肩にかけて背中を向ける。

「お前は本当にこのままでいいんだな」

麻衣子は何も答えずに部屋を出た。



いったい、なんなんだ。あの部長は。どうして上司との面談で、プライベートのことで怒られなきやいけないんだ。ちよくちよくブランドとかデザイナーの話を出してくるのも理解ができない。ましてや結婚を強制するなんておかしいだろ。

誰かを誘って飲みに行きたい気分だった。でも行く人がいなかった。この歳になるとみな結婚してしまい交友関係が一気に減った。二十代を一緒に過ごしてきた仲間たちは、大半が結婚し、子供をつくり、キッズルーム付きのカラオケで昼間にママ友会をしているらしい。

携帯で会社のメールをチェックすると、『【ご報告】』というタイトルが目に入った。入社して三年で会社を辞めた後輩からだった。

いやな胸騒ぎがする。恐る恐るメールを開いた。

ああ。やっぱりそうだ。結婚の報告だった。しかもハワイ旅行の写真付き。

この【ご報告】はだいたいこれだ。

また歳下に先を越されたか。つい「ああ」と声を出してしまい、前から歩いてくる人に顔を見られた。

いつもは気にしないものが、今日はなぜか胸に刺さる。それもこれも宇佐美とかいう変人部長のせいだ。

肩を落として、いつもの帰り道を歩く。

自分が望む生き方をして何が悪い。そう思う一方で、本当に今の生活を続けていいのだろうか。それを考えないようにしている自分があることも知っていた。

結婚してない友達だっている。行きたいときに自由に海外旅行に行ける。去年も思い立ってポルトガルに行った。好きな仕事をして、好きなものを食べている。だけど、ふとした瞬間、こんなことをずっとやっていいのかと不安が過る。気づいたら三十五歳だ。アラサーという便利な言葉も使えなくなった。

子供はつくりたくないのか。老後も一人で生きていくのか。考えないようにしてきたことがたくさんある。まわりの目だつて気にならないと言えれば嘘だ。

そのとき携帯がなった。友達だったら飲みを誘おうと思った。でも画面を見ると母だった。いつ

もだつたら出ないが、誰かと話したい気分なので電話に出た。

「もしもし」

「麻衣子、元気なの」

「うん、元気。お母さんは？」

「あいかわらずよ。最近胸が痛くて、病院通つてるんだけど、お隣の高橋さんがね……」

母は親戚のことや家のことをつらつらと話し始めた。煩わしいと思つてしまった。そうやって話を結婚に持つていくからだ。

「そういえば、いとこのみつちゃんからハガキがきたわよ。子供が産まれたつて。みつちゃんに似たかわいい女の子だった。あんた正月に帰つてこなかったからわからないだろうけど、みつちゃんお腹大きくなって……」

「わたし、まだ結婚する気ないから」話の途中で遮つた。

「どうしてよ」

「今は仕事が忙しいの」

「麻衣子、将来どうするの」母はすがるような声を出した。「ひとり淋しいよ。仕事だけしてたつて、女は幸せになれないじゃない。お母さんだつて大学行けなかつたけど、結婚したところ、毎日が楽しかつたから、麻衣子にも……」

いつもの話になり、苛立つてしまう。

「留学をやめて就職しなさいつて言つたのお母さんじゃない。それなのにどうして、仕事を一生懸命やつちやいけないの」

乱暴に言つて電話を切つた。

はあ、どうしてこうなるのか——。麻衣子は夜空に向かつてため息をついた。

父親は甲斐性のない人で、職を転々としていて、家に帰つてこない時期もあつた。母は働きながら育ててくれた。言葉には出したことはないが、相当な苦勞があつたはず。二年前に父が他界してからはひとり淋しく生活している。それはわかつてるのに、どうしてもうまくいかない。

ますます気分が落ちこんだ。

そうだ。たまには手料理でもつくつて、航平と晩酌しよう。

麻衣子はスーパーで食材を買い、マンションに着いた。宅配ボックスから通販で買った化粧品や段ボールを取り出し、それを脇に抱えて部屋のドアを開けた。

電気はついてない。部屋の微かなぬくもりが今日はなかつた。航平はまだ帰つてきてなかつた。

なんだ。つまらない——。

ライトをつけて、バッグと段ボールを落とすように置き、缶ビールが入つたビニール袋を食卓に置いた。ビニール袋の下に紙が見えた。その紙にはマジックで何か書いてある。

《ここにきてくれ 航平》

メッセージと一緒に地図が書いてあった。

メールでくれればいいのに、わざわざ紙に書くなんて、いったいなんだ。

「あ」麻衣子は声を出して、航平の寝室に向かった。スターウォーズのおもちゃをどけたあと、「航平ゴメン」と手を合わせてから引き出しを開けた。

やつぱりそうだ。この前見た指輪のケースがない。麻衣子はピンときた。これからプロポーズをされる。だから、わざわざ外へ呼び出したのだ。

昔から航平はそういうところがあった。ハロウィンで仮装をしたり、記念日にサプライズをしたり人を喜ばせるのが好きだった。最近はないけど、付き合い始めて何年かは、誕生日プレゼントを凝った渡し方をしてきていた。いいやつなのだ。

麻衣子はすぐさま加奈にメッセージを送った。

《航平から置き手紙。近所のカフェに来て。しかも指輪がなくなってる》

《えー!! それ絶対プロポーズじゃん》

《やつぱりそうかな》

《あんたもうこれ逃したらチャンスないよ》

そうだよ。いったんプロポーズを聞いて、航平との結婚のことを前向きに考えてみよう。転勤

のこととか、今後の生活のことは二人で話し合ってお互いにいい形を見つければいい。宇佐美はわたしなんて結婚できないと言っていたが、必要としてくれる人はいるのだ。

麻衣子は急いでメイクを直し、ばさばさになった髪は、トップにボリュームを持たせてうしろで一本に結んだ。ジャケットからお気に入りのワンピースに着替え、こういう日のために買った石の入ったペンダントトップを合わせた。

航平が指定したのは道路に面した広いカフェだった。テラス席が並んでいて、店の外では不自然にクマの着ぐるみが風船を配ってる。それほど大通りでもないのに、ピエロがパントマイムまでやっていた。来てくれと言った航平の姿はない。

これって、もしかしたらフラッシュモブってやつじゃないの——。きっと、急にカフェの店員やピエロが踊りだして、クマの着ぐるみから出てきた航平が、結婚指輪を差し出しプロポーズをするのだ。

カフェの音楽が止まるたびにドキドキしてしまう。カフェにいる人たちも、どこことなくダンサーっぽい雰囲気を持つてる気がした。

だが、ピエロもカフェの店員が踊りだすことはなく、着ぐるみのクマは人目を気にせず、街路樹の陰で頭を取った。中に入っていたのは知らないおじさんだった。

しばらくして航平がやってきた。ノータイのスーツ姿だ。少し緊張しているように見えた。

「ごめん。遅くなって」

「うん。大丈夫」

サプライズなんてするわけないよね。変な妄想をしていた自分が恥ずかしい。プロポーズを意識しすぎだ。

「麻衣子、俺……」航平から真剣な眼差しを向けられた。

「うん」

それから航平は黙ってしまった。

緊張しているのかと思い、麻衣子はやさしい顔をつくって背筋を伸ばし、プロポーズの言葉を待った。

航平は水を軽く口に含んだあと、のど元を動かした。

「俺、結婚する」